
原 著 論 文

親の情報処理過程と養育スタイルとの関連
—視線追跡装置を用いた少人数によるパイロットスタディ—

宇田川詩帆^a, 蓑崎 浩史^b, 前田 駿太^a, 嶋田 洋徳^c

The Relationship between Parents' Information Processing and Parenting Style
—A Pilot Eye-tracking Study with a Small Sample Size—

Shiho Udagawa^a, Koji Minosaki^b, Shunta Maeda^a, Hironori Shimada^c
(^aGraduate School of Human Sciences, Waseda University, ^bCounseling Center,
Surugadai University, ^cFaculty of Human Sciences, Waseda University)

(Received : November 27, 2015 ; Accepted : May 25, 2016)

Abstract

The present study was a pilot trial to investigate the relationship between parenting behaviors and parents' information processing using eye-tracking methodology with a small sample of parent-child dyads. Twelve dyads of parents and their children participated in two different interaction scenes in which parents praised their children or directed their children to put toys away, during which parents' gaze ratio of child to environment was recorded. Eye-gaze data from only seven dyads were subjected to analysis due to measurement errors. Overall, parents' gaze ratio of child to environment was negatively related to biased information processing about children, and positively related to functional parenting behaviors. We identified several potential problems in adapting eye-tracking methodology to the study of parent-child interactions, which should be solved in future studies.

Key Words : parenting style, information processing, eye-tracking, parent-child interaction

【問 題】

子どもの問題行動の減少,あるいは適切な行動の増加を目的として,親に子どもに対する適切な働きかけを教えるペアレント・トレーニングが盛んに行なわれるようになった¹⁾。このペアレント・トレーニングを基盤とした親支援においては,親の行動と

子どもの行動の双方を扱い,親自身の行動が子どもの行動の先行事象および結果事象として随伴すること,すなわち,相互随伴性の仕組みを,親自身に理解してもらうことに着目している。これは,子どもの行動を変えようと試みる際には,親の行動が変化する必要があるという考え方があり,たとえば,子

^a 早稲田大学大学院人間科学研究科 (Graduate School of Human Sciences, Waseda University)

^b 駿河台大学心理カウンセリングセンター (Counseling Center, Surugadai University)

^c 早稲田大学人間科学学術院 (Faculty of Human Sciences, Waseda University)

どもがおもちゃを片づけるという適切な行動をした際に、親がほめるという行動をとることで、その後おもちゃを片づけるという行動が増加するという現象を観察したとする。この場面において、子どもはおもちゃを片づけるという行動をとると、親からほめられるという結果の経験を通じて学習し、親からのほめなどの快刺激を得ようとして、その後のおもちゃを片づける行動が増加すると理解できる。この際、親のほめは子どもの片づけ行動を増加させるという点において、適切に「機能している」行動であるといえる。ペアレント・トレーニングにおいては、このような、子どもの行動に「機能する親の行動」をそれぞれの親子の相互作用の中から探し出し、実際に親自身が十分に身につけて、遂行していくことが肝要であると考えられる。

これまで、親支援を念頭においた臨床心理学的研究においては、親の養育行動を「機能 (function)」ではなく、「肯定的働きかけ」や「叱責」などの「養育スタイル」という行動の「型 (topography)」で記述し、子どもの問題行動への影響性が検討されてきた^{2, 3)}。たとえば、戸ヶ崎・坂野⁴⁾は、母親の「積極的拒否傾向」が強い児童ほど、家庭における関係維持行動、関係向上行動の獲得が少ないことを指摘している。しかしながら、母親の養育のスタイルが、子どもの行動をある程度予測することが明らかにされている一方で、前述のように、親の養育行動は一方的に生起するのではなく、子どもとの相互作用の中で生起することが前提となっていることは自明の事実であると考えられる。

このような問題点を踏まえた研究として、佐田久・谷⁵⁾は、親支援の中で、子どもの行動に対して親自身がどのように働きかけたかを記録させることによって、親に子どもの行動の「機能」を分析させる介入を行なった。ここでは、親に子どもとの関わりの具体的なエピソードの記述を求め、その記述をもとに子どもの行動の機能を考え、その行動の機能を踏まえて実際にどのように対応していくかを検討するという手続きを用いた。その結果、双方の行動の機能に着目することによって子どもの問題行動の改善や、親の子どもに対する肯定的な発言が実際に促されたことから、親子間の行動の随伴性を記述することは、子どもの行動を変容させるために、「親がどのような関わりをすると良いか」ということを検

討することを可能にすることを示唆している。したがって、親の養育行動と子どもの行動の関係を記述する際には、養育に関する全般的な傾向である「養育スタイル」などの親から子へという一方向性のみを扱う、行動の「型」という観点で検討を行なうのではなく、親子間における相互作用の文脈で生じる実際の親の行動と、それによって反応的に生じる子どもの行動という具体的な側面から検討を行なうことによって、これまでの親支援の実践上の有効性をより高めることが期待できると考えられる。

ところで、これまでの親子の相互作用場面における親および子どもの行動の測定に際しては、ビデオ撮影あるいは直接観察によって、第三者が測定する方法を用いている研究が多く見受けられる^{6, 7, 8)}。たとえば、齋藤・内田⁶⁾は、母親が子どもに絵本を読み聞かせる際の母親の関わりおよび子どもの応答をビデオ撮影し、そのデータ分析を行なった。ここでは、母親が子どもの行動に対して、適切なタイミングで声かけなどを与えているか、また、母親は子どもの主体性を尊重した働きかけをしているか、などの相互作用場面における母子双方の行動が分析対象となっている。その結果、子どもとの体験行動を共有する傾向の高い母親は、絵本の読みきかせ場面においても、子どもに機能する柔軟で温かい言葉かけやうなずきが多いことが示された。この研究に代表されるようにビデオ撮影などを用いた第三者によって行なわれる行動観察によって、親子双方の行動の測定が可能となり、実際の親子の相互作用の中で生じる親子双方の随伴性を記述することによって飛躍的な研究の広がりや臨床場面における実効性の高い支援の提案が期待できると考えられる。

その一方で、このような効果的なペアレント・トレーニングを考える際には、親が子どもの示す行動に関する情報を適切に処理ができていくという大前提が必要である。一般に、認知情報処理過程においては、「刺激の入力」―「刺激の処理」―「刺激の出力」の各段階を経ることが知られているが⁹⁾、このような情報処理過程に従えば、親子相互作用場面において、親が働きかけた後の子どもの反応、とくに表情を「見る (入力する)」ことによって、その後の親の具体的な働きかけの生起および維持に重要な役割を持つと考えられている¹⁰⁾。また、心理臨床的な支援の場においては、子どもに直接的に働きか

けるのではなく、親の行動を変容させることによって、間接的に子どもの行動を変容させることが多いことから、特に親の情報の入力段階に焦点を当てて親子の相互作用を検討することは非常に意義があると考えられる。

しかしながら、いわゆる他者評定に基づく測定方法では、行動観察の精度が非常に高くない限り、相互作用の中で、親自身が目を向けている実際の具体的刺激の精緻な同定が困難であると予測される。そして、この精緻な同定が困難であると、親が子どもの方向を向いているという一見同じように見える行動であっても、本来の意味で親が子どもの表情などの刺激を入力したのか、あるいは子どもがいる方向に視線を向けているものの、周囲の背景などのように子どもの表情以外の刺激を入力したのか差異の記述が困難になり、結果的にそれらに応じた適切な支援計画を立てることが困難になると考えられる。

このような問題点を補う1つの方法論として、視線追跡装置を用いた視線そのものを測定する方略が考えられる。この視線追跡装置を用いることによって、実際の相互作用場面において親が実際に目を向けている刺激の精緻な同定が可能となり、親の入力する刺激と実際に行なう働きかけのプロセスを比較的に詳細に検討することができるようになることが期待できる¹¹⁾。

このような観点に着目した研究はこれまでも行なわれてきたが、親の養育行動に関する研究の動向においては、どちらかといえば、情報処理過程全般というよりも情報処理過程の段階ごとに検討が行なわれてきた。たとえば、「刺激の入力段階」を扱った研究においては、菊野¹²⁾が、子どもの変化に気づきにくい親と気づきやすい親とを比較した場合、注目する子どもの身体部位に差異があることを示しており、不適切な養育行動を用いる親は、「刺激の入力段階」から特異的な情報処理を行なっている可能性があることを示唆している。このような状態を示す親に対しては、たとえば、「お子さんが今何を考えていると思いますか」などといったように、子どもの気持ちの解釈を促す働きかけをするよりも、まず、実際の子どもの様子（行動）に具体的に視線を向けることを促す支援の必要性があると考えられる。

また、「刺激の処理段階」を扱った研究においては、Butterfield¹³⁾が、子どものあいまいな表情に対し

て「この子は元気そうだ」など、ポジティブに偏った解釈を行なう傾向を持つ親は、比較的不適切な養育行動を示す傾向があることを示している。すなわち、刺激そのものは入力されている一方で、「刺激の処理段階」において、子どもの表出する刺激に対する解釈が偏っている（歪んでいる）という特異的な情報処理が生じている可能性を示唆している。したがって、子どもの実際の表情や様子を見ることなしに、過度の叱責等の養育行動を用いる傾向が観察された場合には、「子どもの様子をよく見ましょう」といった声かけなどによる従来型の支援方法を用いるのみではなく、それと並行して子どもの表出する表情などの刺激を適切に解釈（理解）することを促す支援が必要であると考えられる。

以上のことから、親の情報処理過程の偏りを考慮した支援を行なう際には、刺激の入力が適切に行なわれているか、また、刺激に対する解釈が適切であるか、といった点を総合的に検討していくことが必要であることが考えられる。これらの情報処理が適切になされてはじめて、従来の親支援において重要視されてきた、「出力段階」としての「養育スタイルの獲得と遂行」が意味を持つてくるようになることが予測される。

このように、これまでの親に対する情報処理過程の研究においては、親の養育スタイルと情報処理過程の関連性が検討されてきたが、これに加えて、実際の親子相互作用場面においても、親の養育スタイルと情報処理過程の検討を行なうことによって、子どもに対する情報処理の過程が詳細に検討できると考えられる。しかしながら、このようなパラダイムから視線追跡装置を用いて行なわれた研究はほとんど見受けられない。そこで本研究においては、実際の親子の相互作用場面を設定した上で、Figure 1に示すように、親の情報処理過程と養育スタイルを位置づけ、各変数間の関係性を記述することを目的とする。これにあたって、まず少数サンプルを用いたパイロットスタディーを行なうことで、その適切な方法論のあり方も含めて探索的に検討することとした。

【方 法】

研究参加者

関東の幼稚園に在籍する幼児12名（3歳1名、4歳4名、5歳5名、6歳2名；平均年齢 4.67 ± 0.85 歳）

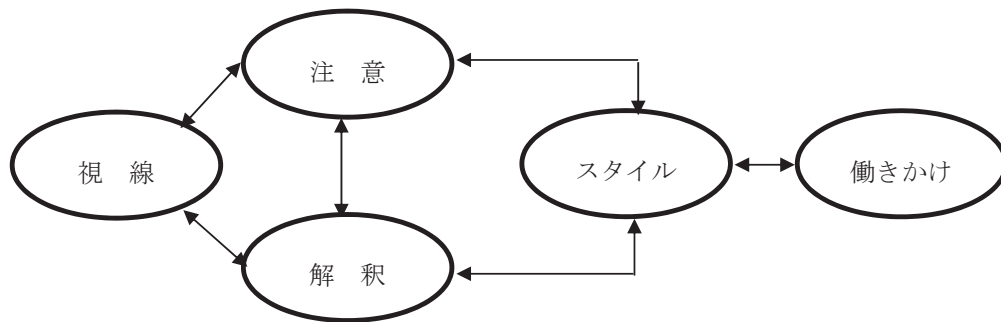


Figure 1 本研究における各変数の関係性を示したモデル。

と、その母親12名（平均年齢 36.25 ± 3.14 歳）を対象とした。

測 度

フェイス項目 親の年齢、子どもの年齢、子どもの性別、兄弟の有無と対象となっている子どもについての続柄について回答を求めた。

養育スタイル 三鈷¹⁴⁾の養育スキル尺度を用いた。養育スキル尺度は誘導的しつけ、感情的叱責、注目・関与、スパンキング、物的報酬、援助的コミュニケーション、きげんとり、不適切行動の無視、身体的攻撃の9つの下位尺度計45項目で構成されている。また、本尺度は、高い基準関連妥当性、併存的妥当性を有することが示されており、内的一貫性に関して一定の高さを有することが示されている¹⁴⁾。なお、本研究においては、9つの下位尺度の中から、「誘導的しつけ」、「注目・関与」、「援助的コミュニケーション」の3つの合計点を「肯定的なスタイル」とした。また、「感情的叱責」、「スパンキング」、「不適切行動の無視」、「身体的攻撃」の4つの合計点を「否定的なスタイル」とした。

子どもに対する親の視線の割合 アイマークレコーダ（NAC社製、EMR-9帽子タイプ）を用いた。子どもに対する視線の割合を算出するにあたり、アイマークレコーダで撮影した映像をコマ送りで再生し（30フレーム/秒）、映像上にインポーズされた実験参加者の視線がどの領域（子ども、子ども以外）に配置されているかを計測した。その後、子どもに視線が配置されたフレーム数を総フレーム数で割ることで、子どもに対する視線の割合を算出した。

子どもに対する働きかけ 親が子どもに働きかけ（声かけ、物を渡す等）を行なった後に、賞賛場面（親に子どもをほめるように教示）においては子どもが

笑った回数、指示場面（親に対して子どもに遊んだ後のおもちゃを片づけるように教示）においては子どもが片づけを行なったプロセスにおいて、都度指示に従った回数を「機能的な働きかけ」としてカウントした。また、子どもがそれ以外の反応を示した回数を「非機能的な働きかけ」としてカウントした。たとえば、親が「片づけようね」と声かけをしながらおもちゃを渡した際に、子どもがおもちゃを受け取って片づけた際は「機能的な働きかけ」、子どもがおもちゃを受け取らない、受け取ったおもちゃを片づけずに遊び続けるなどの行動が見られた際には、「非機能的な働きかけ」と定義した。なお、回数のカウントについては、臨床心理学を専攻する大学院生1名が録画されたビデオをみながら事後に評価を行なった。

親子相互作用場面における子どもの気持ちに対する親の解釈（想起時、ビデオ提示時） 本研究においては、親の働きかけ（賞賛あるいは指示）の実施後、親に別場所への移動を求め、約10分後に、Plutchik¹⁵⁾の基本感情に基づく子どもの表情に対する種類およびその程度に関する回答を求めた。親が働きかけた後から10分後に子どもの表情を思い出してもらった際の回答を「想起時」、親が働きかけた際の子どもの表情について実際にビデオを再生し、提示した際の回答を「ビデオ提示時」とし、「想起時」の値から「ビデオ提示時」の値を減算した値を「注意バイアス」と操作的に定義し、これが正の大きい値であるほど、親が子どもの感情を基準値よりも強く見積もっているとみなすこととした。なお、子どもの表情やその程度に関する評価尺度はPlutchik¹⁵⁾が提唱した8つの基本的感情8項目のそれぞれに対して、1（全く思わない）～4（とてもそう思う）

の4件法で回答を求めた。

親子相互作用場面における子どもの気持ちに対する解釈（他者評定） 本研究においては、親の働きかけ（賞賛あるいは指示）の実施後、親に別場所への移動を求め、約10分後に、Plutchik¹⁵⁾の基本感情に基づく子どもの表情に対する種類およびその程度に関する回答を求めた。親が働きかけた際の子どもの表情について実際にビデオを再生し、提示した際の親の回答の値から、大学院生の回答の値を減算した値を、「解釈バイアス」と操作的に定義し、これが正の大きい値であるほど、親が子どもの感情を基準値よりも強く見積もっているとみなすこととした。なお、子どもの表情やその程度に関する評定尺度はPlutchik¹⁵⁾が提唱した8つの基本的感情8項目のそれぞれに対して、1（全く思わない）～4（とてもそう思う）の4件法で回答を求めた。評定は臨床心理学を専攻する大学院生2名で行なった。各評定者がPlutchik¹⁵⁾の標準的な刺激表情に従い、12名の表情すべてをみて評価を行なった後、評定者2名の回答結果が一致するまですり合わせを行ない、他者評定得点を決定した。

手続きおよび倫理的配慮

調査は親1名につき、1名の子どもで構成されている親子1組ずつで行なわれた。その際、参加者である親に対して、本研究は親子の相互作用と親の視線の関連を検討する研究であるという説明を行なった。フェイス項目および養育スキル尺度への回答、視線追跡装置の装着、および視線追跡装置の録画と行動観察用のビデオの録画を開始した。視線追跡装置の装着に約10分間を費やした。また、装置の装着およびビデオ撮影に馴化させることを目的として、さらに10分間、実験者が部屋から退出した状態で、「なるべくいつもどおり」親子で遊ぶように教示を行なった。

また本研究では、親子の相互作用が生じやすいと考えられる「賞賛場面」と「指示場面」という2つの場面を設定した。まず「賞賛場面」を場面1として、子どもに見本と同じキャラクターをプリントの中から探してもらおうという「十分に簡単な課題」を行なってもらい、課題達成後、親が子どもをほめるよう教示を行なった。その後、親に子どもの表情に対する尺度への回答を求めた。また、「指示場面」を場面2として、子どもにおもちゃで遊ぶように指

示し、親には、10分後子どもにおもちゃを片づけるよう声をかけるように求めた。親子の相互作用が生じる操作（賞賛、あるいは指示）の実施後、親に別場所への移動を求め、約10分後に、Plutchik¹⁵⁾の基本感情に基づく子どもの表情に対する種類および程度への回答を再度求めた。

なお、本研究は早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を受けて実施された（承認番号：2013-146）。

【結 果】

本研究では、Figure 1のモデルに従って、それぞれの関係性を探索的に検討した。なお、以下の分析においては、欠損データはペアワイズ削除をして分析した。

親の特徴と子どもに対する注視の程度との関連性

まず、Figure 1のモデルにおける変数間の関係性の検討に先立って、デモグラフィック項目と子どもに対する注視の程度との関係を検討するために、これらの変数の関係を散布図に示した（賞賛場面： $N = 6$ 、指示場面： $N = 7$ 、Figure 2（親の年齢）、Figure 3（子どもの年齢））。散布図の作成に際しては、分析が可能な視線データが得られた（視線のエラー率：全データ取得時間のうち親の視線がフレームからはずれた時間の割合が60%以下）親子のデータのみを分析対象とした。なお、賞賛場面においては、課題が達成された時点から子どもに対する親の働きかけが終了した時点まで（16.38秒 \pm 7.05秒）を、指示場面においては、親が子どもに片づけるよう働きかけた時点から片づけが終了した時点まで（76.65秒 \pm 49.46秒）を、視線および働きかけの計測区間とした。散布図の視察の結果、親および子どもの年齢と、子どもに対する注視率には特徴的な関係は見受けられなかった。子どもの性別と注視率の関係については、賞賛場面、指示場面ともに、子どもが女兒である場合に、親が子どもを多く注視する傾向にあった（それぞれ、 $r = .82, p = .04$ ； $r = .60, p = .15$ ）。また、一度子育てを経験することによって、それ以降に出生した子どもを十分に注視せずに、それまでの経験に基づいて養育行動を実行するようになることが予測されることから、子どもの出生順序と注視率の関係についても検討を行なった。出生順序と注視率の関係について、本研究に参加し

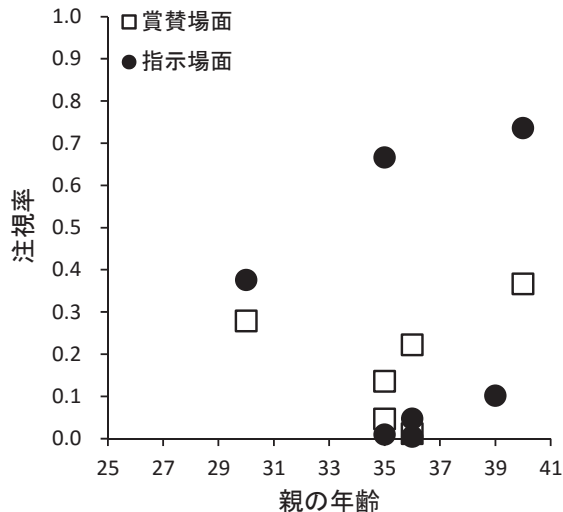


Figure 2 親の年齢と子どもに対する注視率の関係。

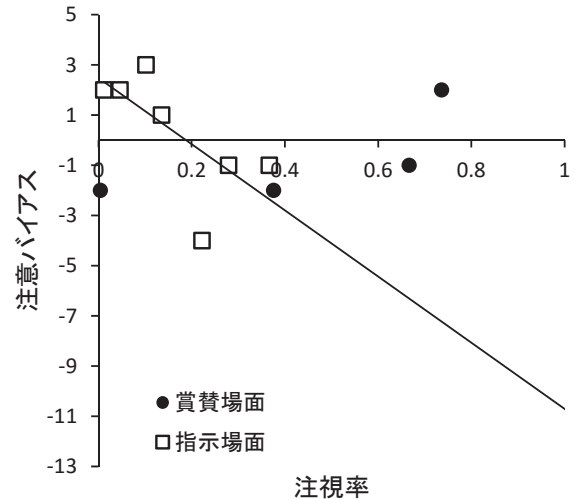


Figure 4 子どもに対する注視率と注意バイアスの関係 (直線は指示場面における回帰直線)。

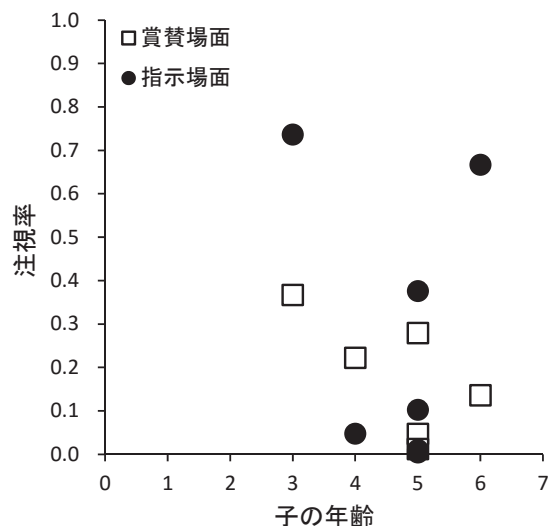


Figure 3 子の年齢と子どもに対する注視率の関係。

た子どもは第1子または第2子であったが、子どもが第2子の場合の方が親が子どもを多く注視する傾向にあった (それぞれ, $r = .82, p = .04$; $r = .60, p = .15$)。ただし、本研究においては、第1子はすべて男児であり、第2子はすべて女児であった。

子どもに対する注視の程度と情報の入力段階のバイアスとの関連性 (視線－注意)

まず、親の子どもの表出する刺激に対する情報処理過程において、子どもに対する実際の注視の程度と、情報の入力段階のバイアスについて検討するために、観測時間中の親側の子どもに対する視線の割合と注意バイアス (相互作用場面想起時の子どもの気持ちに対する評定値－ビデオ視聴時の子どもの気持ちに対する評定値) の関係を散布図に示した

(賞賛場面: $N = 6$, 指示場面: $N = 7$, Figure 4)。散布図の視察の結果、指示場面においては子どもに対する注視をしている者ほど、注意バイアスが小さくなる傾向が見受けられた ($r = -.70, p = .08$)。一方で、賞賛場面においては特徴的な関係は見受けられなかった ($r = .04, p = .94$)。

子どもに対する注視と情報の処理段階のバイアスとの関連性 (視線－解釈)

前述の注意バイアスと同様に、親の子どもの表出する刺激に対する情報処理過程において、子どもに向ける視線の割合と解釈バイアスがどのように生じているかを検討するために、親の子どもに対する視線の割合と、解釈バイアス得点との関係を散布図に示した (賞賛場面: $N = 12$, 指示場面: $N = 12$, Figure 5)。散布図の視察の結果、賞賛場面においては、子どもに対して注視をしている者ほど、解釈バイアスが小さくなる傾向が見受けられた ($r = -.77, p = .07$)。一方で、指示場面においては特徴的な関係は見受けられなかった ($r = -.14, p = .77$)。

親子相互作用における情報の入力段階のバイアスと処理段階のバイアスとの関係 (注意－解釈)

親の子どもの表出する刺激に対する情報処理過程において、情報の入力段階のバイアスと処理段階のバイアスにどのような関連性があるのかを検討するために、親の注意バイアス得点と解釈バイアス得点の関係を散布図で示した (賞賛場面: $N = 12$, 指示場面: $N = 12$, Figure 6)。散布図を視察した

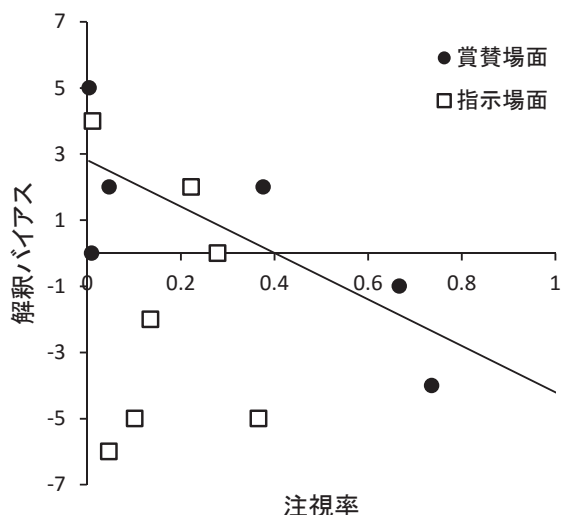


Figure 5 子どもに対する注視率と解釈バイアスの関係（直線は賞賛場面における回帰直線）。

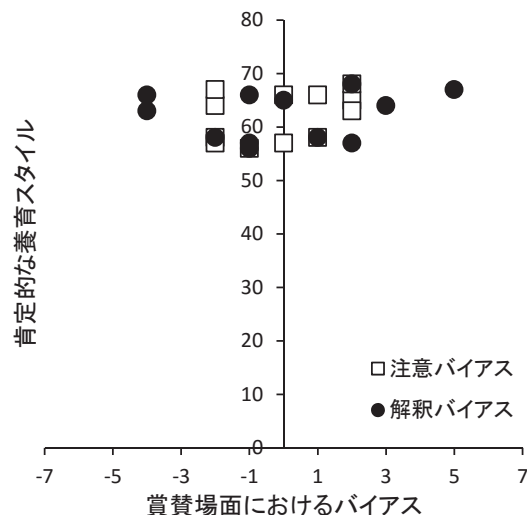


Figure 7 賞賛場面における情報処理バイアスと養育スタイルの関係。

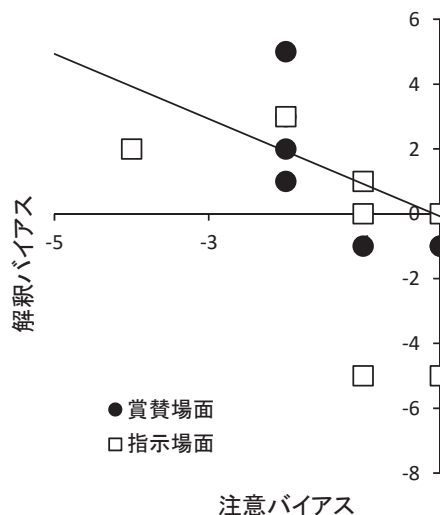


Figure 6 注意バイアスと解釈バイアスの関係（直線は賞賛場面における回帰直線）。

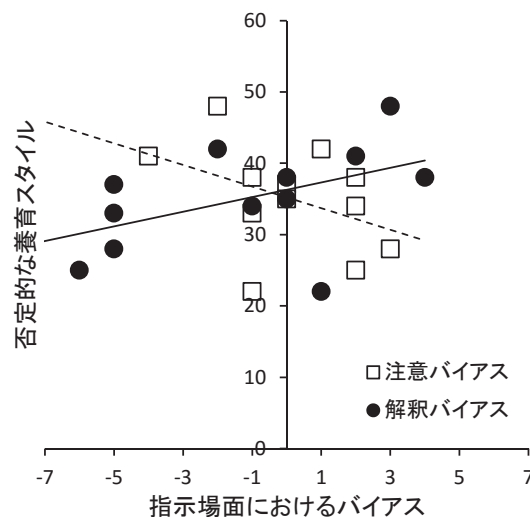


Figure 8 指示場面における情報処理バイアスと養育スタイルの関係（実線は解釈バイアス、破線は注意バイアスを説明変数とした回帰直線）。

ところ、賞賛場面においては注意バイアス得点が高い者ほど解釈バイアス得点が低くなる傾向が見受けられた ($r = -.62, p = .03$)。一方で、指示場面においては、注意バイアスと解釈バイアスに特徴的な関係は視察されなかった ($r = -.41, p = .18$)。

情報の入力、処理段階のバイアスと養育スタイルの関連性（注意—スタイル、解釈—スタイル）

親の子どもの表出する刺激に対する注意バイアスおよび解釈バイアスが、親の表出する養育スタイルとどのような関連性があるのかを検討するために、親の注意バイアス得点と解釈バイアス得点および養育スキル得点との関係を散布図に示した（賞賛場面： $N = 12$ ，指示場面： $N = 12$ ，Figure 7（賞賛場面），

Figure 8（指示場面））。その結果、指示場面における注意バイアスと親の否定的な養育スタイルの間には負の関係 ($r = -.42, p = .18$)，指示場面における解釈バイアスと親の否定的な養育スタイルの間には正の関係が見受けられた ($r = .48, p = .12$)。一方で、親の肯定的なスタイルと、賞賛場面における注意バイアス、および解釈バイアスの間には特徴的な関係は見受けられなかった（それぞれ、 $r = .36, p = .25$ ； $r = .18, p = .58$ ）。

子どもに対する働きかけが機能した程度（スタイル—働きかけ）

分析に際しては、12組の親子のデータを分析対象とした。質問紙によって測定された肯定的なスタイル

ルおよび否定的なスタイルと、実際の行動観察によって測定された養育スタイルの関連性を検討するために、養育スキル得点と、ビデオ観察による機能的働きかけおよび非機能的働きかけの間の関係を散布図に示した（賞賛場面： $N = 12$ ，指示場面： $N = 12$ ；Figure 9：肯定的養育スタイル，Figure 10：否定的養育スタイル）。散布図の視察の結果，肯定的スタイルと機能的働きかけの間に負の関係が見受けられた（ $r = -.62$ ， $p = .03$ ）。その他の組み合わせでは特徴的な関係は見受けられなかった。

子どもに対する注視と働きかけが機能した程度の関係（視線－働きかけ）

親の子どもに対する注視と，親の表出する養育スタイルにどのような関連性があるのかを検討す

るために，親の子どもに対する視線の割合と，ビデオ観察による機能的働きかけおよび非機能的働きかけの間の関係を散布図に示した（賞賛場面： $N = 6$ ，指示場面： $N = 7$ ，Figure 11：機能的働きかけ，Figure 12：非機能的働きかけ）。散布図の視察の結果，賞賛場面における子どもへの注視率と機能的働きかけの間には正の関係（ $r = .72$ ， $p = .11$ ），非機能的働きかけの間には負の関係（ $r = -.64$ ， $p = .17$ ）が見受けられた。また，指示場面における子どもへの注視率と非機能的働きかけの間には負の関係（ $r = -.70$ ， $p = .08$ ）が見受けられたが，注視率と機能的働きかけの間には特徴的な関係は見受けられなかった（ $r = -.30$ ， $p = .62$ ）。

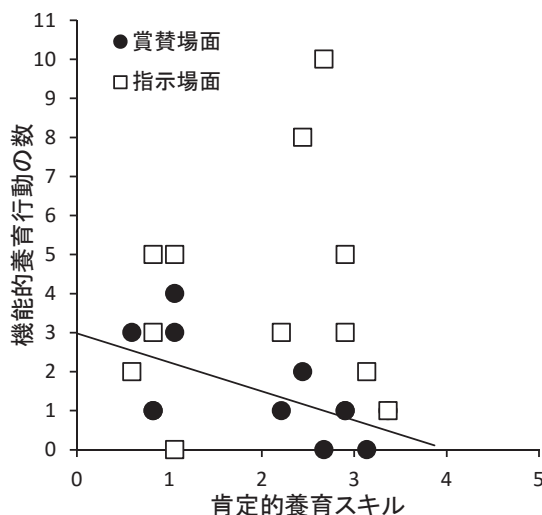


Figure 9 肯定的養育スキルと機能的養育行動の関係（直線は賞賛場面における回帰直線）。

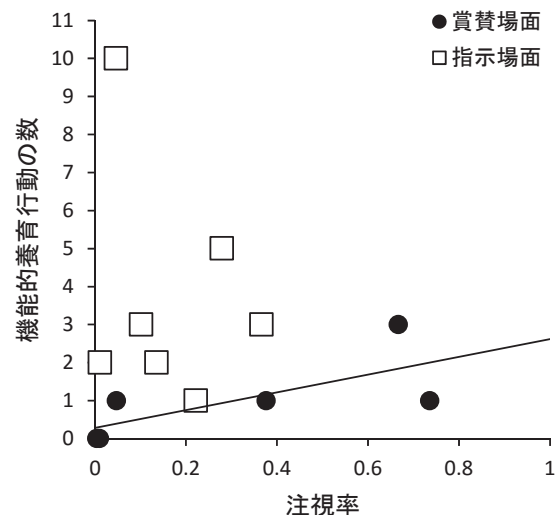


Figure 11 注視率と機能的養育行動の関係（直線は賞賛場面における回帰直線）。

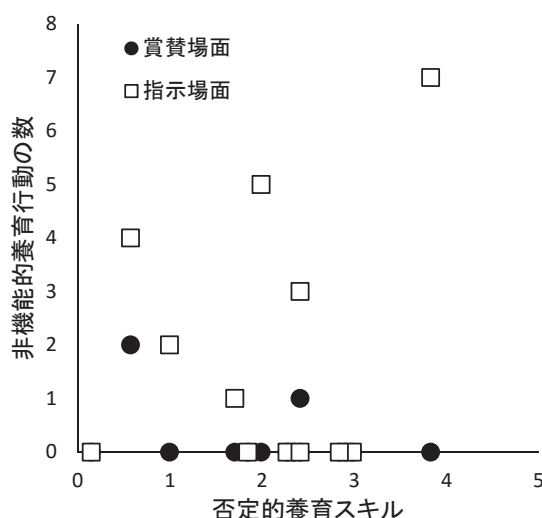


Figure 10 否定的養育スキルと非機能的養育行動の関係。

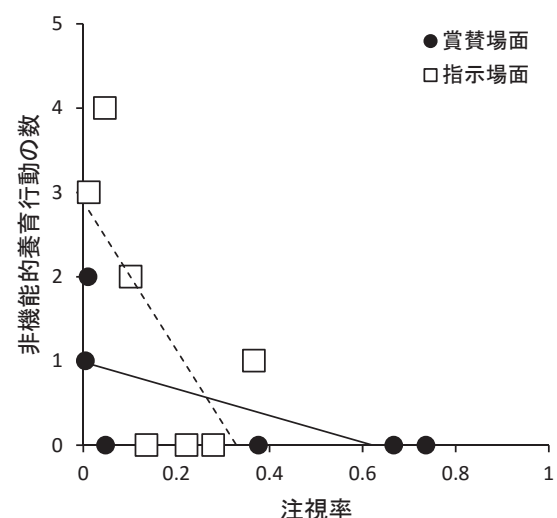


Figure 12 注視率と非機能的養育行動の関係（実線は賞賛場面，破線は指示場面における回帰直線）。

【考 察】

本研究の目的は、親子の実際の相互作用場面を設定し、親の情報処理過程、すなわち、視線追跡装置を用いて測定される親の視線の向きおよび、子どもの表情に対する解釈と、養育行動のスタイルとの関連性を探索的に記述することであった。

本研究の結果をFigure 1に沿って整理すると、まず、相互作用場面において子どもを多く注視している者は、注意、解釈のバイアスのいずれも示にくい傾向にあることが散布図の視察から推察された。注意、解釈などの親の情報処理バイアスの背景には、子どもに関する情報入力の変りがあると想定されるため、この結果は整合的に理解可能なものであると考えられる。

また、注意バイアスと解釈バイアスの関係については、賞賛場面においては、注意バイアスと解釈バイアスの間には負の関係が見受けられたが、指示場面においては特徴的な関係は視察されなかった。すなわち、注意バイアスと解釈バイアスの間には一貫した関係は見受けられなかった。この点に関しては、理論的に、注意バイアスを示しやすい者においては解釈バイアスもそれに比例して促進されることが予測されたが、本研究の結果からは、親側の子どもに対する情報処理バイアスの様相は、個人差が大きいことが示唆される。すなわち、子どもの様子をよく見ておらず、思い込みで接している親と、子どもの様子は見ているものの、その解釈が必ずしも適切ではない親という2つの臨床像があることを示唆していると考えられる。このことは、さまざまな親の状態を適切に評価し、それに合致する個別の支援を行なうことの重要性をさらに裏づけるものであると考えられる。たとえば、過度に叱責するなどの否定的な養育行動に対して、「子どものことをもっとよく見ましょう」などと伝えることを重視する従来型の親支援では、解釈バイアスのみを有する臨床像に対してはほとんど機能しないことが推測される。このように、情報処理過程の中でも入力された刺激の解釈に偏りがある臨床像に対しては、親自身の働きかけの結果事象の解釈の偏りの変容を促すことで、情報処理の偏りに合わせた支援が可能となることが考えられる。

また、本研究においては、上述のような情報処理のバイアスを有する程度と実際の養育スタイルの間

にも関係が見受けられることを想定していた (Figure 1)。実際に、指示場面における解釈バイアスと親の否定的な養育スタイルの間には正の関係が見受けられ、子どもの表情に対する解釈が不適切な親は否定的な養育行動に至りやすい傾向にあることが示唆された。その一方で、指示場面における注意バイアスと親の否定的な養育スタイルの間には負の関係が見受けられるという、理論的な前提と必ずしも合致しない結果が得られ、さらに、賞賛場面においては変数間に特徴的な関係は見受けられなかった。これらの結果を整合的に理解しようとする際には、ここで用いている養育スタイルという変数は、あくまでも養育行動の「型 (topography)」によって定義されるものであることを念頭に置くことが必要であると考えられる。すなわち、養育スタイルにはその表現型をもって便宜的に「肯定的」「否定的」というラベルが付与されてはいるものの、賞賛や叱責といった特定の行動を行ないやすい傾向が子どもに対してどのように機能するかは、本来、「働きかけの結果」を直接的に観察しない限り評価することはできない。情報処理バイアスと養育スタイルの間に明確な関係が見受けられなかった背景には、このような養育スタイルという概念上、および測定方法論上の限界が存在すると考えられる。

その一方で、親の子どもに対する注視と、場面観察によって評価された、親の働きかけの機能の関係を検討したところ、賞賛場面における子どもへの注視と機能的働きかけの頻度との間には正の関係、非機能的働きかけの頻度との間には負の関係が見受けられた。指示場面においては、注視率と機能的働きかけの間には特徴的な関係は見受けられなかったものの、非機能的働きかけの頻度との間には負の関係が見受けられた。これらの結果を総括すると、予測通り、場面内における子どもに対する注視率が高いほど機能的働きかけが促進され、非機能的働きかけが抑制されることが示唆される。養育スタイルの概念との対比において、本研究における場面観察による養育行動の評価は、機能的側面、すなわち、実際に親の意図が達成されたか否かという「結果」の観点からボトムアップになされたため、その行動の是非が明確になりやすいという利点があると考えられる。そして、実際に、情報処理の初期段階における重要な変数である、子どもに対する注視と、これら

の働きかけの間に関係が見受けられたことは、適切な養育行動の生起における親の情報処理の有用性を裏づけるものであると考えられる。

このように、本研究における、実際の親子相互作用場面における、視線追跡装置を用いた親の情報処理過程の検討、および行動観察に基づく親の養育行動の機能面からの評価は一定の有用性をもつ方法論であると考えられる。その一方で、これらの方法論の運用においては、複数の課題が存在すると考えられる。まず、視線追跡装置の使用の際の、測定上の不良データの発生の多さが挙げられる。本研究の視線測定においては、実際の親子の動的な相互作用場面を設定したため、親の注視点がフレームから外れるエラーの発生が多く見受けられた。そして、結果的に、エラー率が低い者のみを分析対象とした結果、当初のサンプル数の約50%近くが分析対象から除外された。このようなサンプル数の減衰は結果に歪曲をもたらす可能性が高いため、今後の研究においてはこの点の改善が急務であると考えられる。具体的な対策としては、頭部を大きく動かさないようにしてもらう教示の徹底、親子間の距離をはじめとした実験場面の工夫、あるいは据え置き型の視線追跡装置の使用などが挙げられる。その一方で、測定における生態学的な妥当性を保つためには過度に参加者に対して行動上の制限を設けることは望ましくないため、バランスを考慮することが肝要となると考えられる。

また、このような実際の相互作用の観察に基づく方法論を用いるにあたって、親側の個人差を考慮することは不可欠であると考えられる。たとえば、本研究においては、わずかのサンプルで第2子において親が子どもを多く注視する傾向が見受けられたが、これは第2子において親が子どもを注視しなくても適切な養育を遂行できるという経験則とは合致しないものである。このことから、出生順序よりも親側の個人差の方が注視に及ぼす影響が大きいことが示唆される。このように大きな個人差が存在すると考えられる変数を扱う際には、当然のことながらある程度大きなサンプルサイズを確保する必要があると考えられる。しかしながら、本研究のように実際の親子相互作用を視線追跡装置を用いて検討するデザインの研究は相応のコストを伴うものであり、大きなサンプルサイズを確保することは必ずしも容易ではないということも念頭においておくことが必要で

あると考えられる。

加えて、「注意バイアス」および「解釈バイアス」得点の算出について、本研究においては、これらの得点が正の大きい値をとるほど、バイアスが大きいという前提を有していた。しかしながら、これらの得点が負の大きい値をとる状態像の親の中にも、子どもの表情に対して適切に評価をしていない親が含まれていることが考えられる。今後は、子どもの表情に対して過剰に評価をする親だけでなく、子どもの表情に対して過小評価をしている親を含めて総合的に検討する必要があると考えられる。

さらに、本研究においては、他者評定得点の算出について、臨床心理学を専攻する大学院生2名の回答結果を基に、合議によって決定した。事前に十分訓練を受けていることを基準として、大学院生が12名すべての子どもの表情を標準刺激と比較することをもって回答を行なったが、必ずしも大学院生の評定が適切な基準とならない可能性も考えられる。したがって、今後は、実際に子どもに日常的に接している親の評価と、大学院生の評価の比較を慎重に行ないながら検討する必要があると考えられる。また、本研究においては、親の機能的および非機能的働きかけについて、大学院生1名が評定を行なった。しかしながら、評価の妥当性をさらに高めるために、複数の評定者によって評価することが必要であると考えられる。

また、本研究においては、親側の情報処理過程におけるデータおよび行動から、間接的に子どもの行動が予測されることを前提として、親子相互作用の検討を行なった。しかしながら、親子の相互作用をより具体的に記述するためには、本研究で用いた親側のデータに加えて、「子どもの行動観察の結果」も加えて親子相互作用の機能を記述することが必要であると考えられる。

これらの課題に加えて、パイロットスタディとして探索的に検討を行なった本研究においては、さらに研究の手続き上の課題がいくつか残されている。本研究では、視線追跡装置およびビデオ撮影の馴化時間を10分間とした。しかしながら、このような短時間の馴化では、日常生活に近い親子の相互作用を十分に引きだせなかった可能性があることが予測される。本研究においては、あくまでもパイロットスタディとしての記述にとどまるが、今後は、馴化時

間を十分に確保するなど、より日常生活の親子の相互作用が再現されやすいような手続きを用いる必要があると考えられる。また、本研究において設定した賞賛場面および指示場面での親子の相互作用について、場面による相互作用の時間の差を仮定していなかった。しかしながら、結果として親子相互作用の時間について、場面間で差が見られたため、今後は場面間の時間差が生じにくい場面設定を行なうことを課題とする。

さらに、本研究で用いた手続きは「想起」時においてとくに、子どもの表情を想起する際にいわゆる「記憶バイアス」が生じていると理解することも可能である。しかしながら、本研究においては、実際に子どもの表情を見てから想起してもらうまでの時間が10分間程度と比較的短いため、記憶バイアスの影響を受けているとはみなさなかった。今後の課題として、記憶バイアスの位置づけを明確にすることを行なった上で、再度同様の検討を行なう必要があると考えられる。

このように、本研究はパイロットスタディであったため、測定の方法論上、変数の概念的定義上、サンプルサイズおよびサンプルの性質上、多くの課題を有するものであったが、今後の研究において改善されるべき点を提案できた点において相応の意義を有するものであると考えられる。今後の研究においては本研究において見受けられた課題を適切に解決し、適切な養育行動に至るための親の情報処理過程についての検討がなされることが期待される。

【引用文献】

- 野口 啓二 (2003). 児童虐待への取り組み——ペアレント・トレーニングを用いた親へのアプローチ—— 行動療法研究, 29, 107-118.
- 中島 俊思・岡田 涼・松岡 弥玲・谷 伊織・大西 将史・辻井 正次 (2012). 発達障害児の保護者における養育スタイルの特徴 発達心理学研究, 23, 264-275.
- 小林 智子 (2013). 親子活動をとりいれた緩やかなペアレント・トレーニングの試み——地域における子育て支援への一案—— お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, 15, 13-23.
- 戸ヶ崎 泰子・坂野 雄二 (1997). 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響——積極的拒否型の養育態度の観点から—— 教育心理学研究, 45, 173-182.
- 佐田久 真貴・谷 晋二 (2007). 被虐待児とその母親への包括的支援——適応的な母子相互作用をつくりだすカウンセリングの2事例から—— 行動療法研究, 33, 59-74.
- 齋藤 有・内田 伸子 (2013). 幼児期の絵本の読み聞かせに母親の養育態度が与える影響——「共有型」と「強制型」の横断的比較—— 発達心理学研究, 24, 150-159.
- 尾関 唯未・浅野 みどり・石黒 彩子・三浦 清世美 (2005). 育児不安軽減のための看護支援に関する研究——遊びを通じた母子相互作用の促進—— 日本小児看護学会誌, 14, 58-64.
- 佐藤 鮎美・内山 伊知郎 (2012). 乳幼児における絵本共有が子どもに対する母親の働きかけに及ぼす効果——絵本共有時間を増加させる介入による縦断的研究から—— 発達心理学研究, 23, 170-179.
- 阪田 真己子 (2006). 目は口ほどにモノを言う——眼球運動計測の研究事例—— 表現文化研究, 6, 103-116.
- 奥田 健次 (2011). 叱りゼロで「自分からやる子」に育てる本 大和書房.
- 宇田川 詩帆・蓑崎 浩史・嶋田 洋徳 (2015). 親子相互作用の測定に関する現状と課題 早稲田大学臨床心理学研究, 14, 179-186.
- 菊野 春雄 (2010). 大人による子どものTOM行動の認識——母親は子どもの心のサインをどのように読み取るか—— 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 8, 157-162.
- Butterfield, P.M. (1993). Responses to IFEEL Pictures in mothers at risk for child maltreatment. In R.N.Emde, J.D.Osofsky,& P. M.Butterfield (Eds.), *The IFEEL Pictures: A new instrument for interpreting emotions* (pp.161-173). Connecticut: International Universities Press.
- 三鈴 泰代 (2009). 幼児期の子どもをもつ親の養育スキルに関する研究——親の養育スキルと子どもの行動傾向との関連—— 発達研究, 22, 181-190.
- Plutchik, R (1960). The multifactor-analytic theory of emotion. *The Journal of Psychology*, 50, 153-171.